



報告書

日時:2020年10月4日(日) 13:30~15:30

場所:TKPガーデンシティ仙台ホール21

主催:仙台市

2021～2030年度の10年間のまちづくりの方向性を示す新しい「仙台市基本計画」の中間案では、まちづくりの理念として「挑戦を続ける、新たな杜の都へ～“The Greenest City” SENDAI～」を掲げ、重点的な取り組みとして8つのチャレンジプロジェクトを掲げています。

中間案のとりまとめを機に、将来の仙台の姿をイメージしつつ、まちづくりで自身ができることに取り組む方が増えていよう、市民の皆さんと対話の機会をつくるため、このイベントを開催しました。

イベントには、高校生から80代までの約100名(会場参加70名、WEB参加約30名)の方が参加し、チャレンジプロジェクトをテーマに、仙台市総合計画審議会の委員の方々とともに「仙台の未来」や「私たちがチャレンジできること」について話し合いました。

登壇者

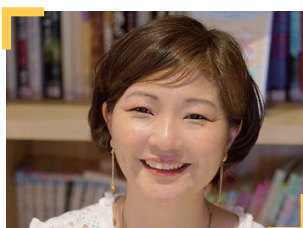


東北大学教授

奥村 誠さん

東北大学災害科学国際研究所、同大学院工学研究科土木工学専攻、東北アジア研究センターに所属し、災害対応等に関する研究に従事。専門は土木計画学。

仙台市総合計画審議会会長、
仙台市都市計画審議会会長。



特定非営利活動法人
まちづくりスポット仙台ディレクター

岩間 友希さん

週末一軒家プロジェクト、仙台市地下鉄東西線WEプロジェクト、せんだいリノベーションまちづくり実行委員会など、さまざまなプロジェクトに参画。仙台市総合計画審議会委員。

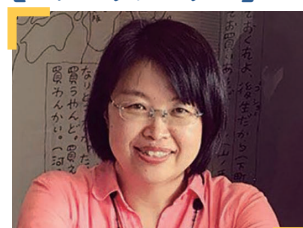


特定非営利活動法人
都市デザインワークス代表理事

榊原 進さん

震災復興まちづくりや定禅寺通活性化など、市民主体のまちづくりを支援するとともに、仙台都心を流れる広瀬川一帯の魅力を高める「せんだいセントラルパーク」の提案と実践、仙台海手めぐりキャンペーンのコーディネートなどにも取り組んでいる。仙台市総合計画審議会委員。

【ファシリテーター】



地域社会デザイン・ラボ代表

遠藤 智栄さん

仙台・東北エリアを中心に、NPO・自治組織・企業・行政等と協働連携や人材育成、組織開発、ワークショップ企画などの支援を行っている。
(株)ばとん代表取締役、仙台市総合計画審議会副会長。

プログラム

イベントの様子はYouTubeライブで生配信を行い、事前に申し込みした約30人がWEB参加。チャットを使ってご意見をいただきました。

13:30	開会・市長あいさつ
13:35	オープニングトーク
13:55	クロストーク(Part 1) ●総合計画審議会委員によるプレゼン ●委員・参加者とのクロストーク
14:35	クロストーク(Part 2) ●総合計画審議会委員によるプレゼン ●委員・参加者とのクロストーク
15:15	まとめ
15:30	閉会

郡仙台市長あいさつ

総合計画は今後10年のまちづくりの方向性を示すものです。まちづくりは市民の皆さんとともに進めていくものであり、未来に向けて「何をすべきか」「何ができるか」を皆さんと一緒に考える場として、本イベントを開催しました。

イベントの副題には「チャレンジを続ける新たな杜の都へ」を掲げました。変化の激しい時代だからこそ、目指す都市の姿に向かってチャレンジを重ねていくことが大切だと考えています。皆さんの知恵や力を集めて、厳しい時代にあってもしなやかに乗り越えるまちを目指したいと思います。



オープニングトーク

オープニングトークでは、仙台市総合計画審議会の会長である奥村誠さんに、イベントのファシリテーターで、審議会の副会長を務める遠藤智栄さんが「仙台のまち」や「新しい計画に込めた思い」についてインタビュー形式でお話を伺いました。

遠藤さん：奥村会長が国内・海外の各地に住んでみて感じる、仙台のいいところ、残念なところはどんなところだと思いますか。

奥村さん：仙台は住みやすいですね。必要なものがしっかり整備されていて、子育てもしやすいし、プロスポーツも楽しめるし、基本的な力はものすごくあると思います。一方で、大きなまちには、わくわく感や、いい意味での裏切られた感というのがちょっと少ないような気がしています。そういう意味で、もうひと頑張り必要。それが今回の計画の「チャレンジ」という言葉にも表れていると思います。



遠藤さん

遠藤さん：新しい計画の「チャレンジ」に込めた思いについて教えてください。

奥村さん：大事なのは、やっぱり得意なことでチャレンジすることですね。人間と同じで、無いものねだりをして穴を埋めることばかりに一生懸命になっても、標準的なものしか出来上がらないし、個性も伸びない。新しい計画は、仙台の個性を活かすようなものにしたいと思っています。

遠藤さん：審議会の議論の中でも、奥村会長が特に「個性を活かしていきましょう」と繰り返しおっしゃっていたことが思い出されました。8つのチャレンジプロジェクトにはどんな思いが込められているのでしょうか。

奥村さん：まちの将来の主人公って誰なんだろうと考えたときに、役所のための計画を考えてもしょうがないですね。市民の皆さんや企業、それぞれがお持ちの知恵や力を持ち寄りつつ、みんなで取り組めることが重要で、そういう願いも込めて方向性としてまとめたものが8つのプロジェクトになりました。ここから、新しいアイデアや取り組みが生まれることを期待しています。仙台市の個性である「杜の都(緑)」のイメージ。その意味を膨らませ、「今よりもっとよく」との思いを込め、新しい計画では、グリーンに最上級の「est」を付けた「Greenest City」という言葉を掲げました。現状に満足せず、「次にもっとできることはないかな」とみんなが取り組んでくれるような、そんなまちになってくれるといいと思います。



奥村さん

8つのチャレンジプロジェクトをテーマに、
「仙台の未来」や「私たちにできること」について、参加者ひとりひとりが考えました。
はじめにチャレンジプロジェクト①～④について、
岩間さんと榊原さんに具体的な取り組みを紹介していただきました。

① 杜と水の都プロジェクト ———— 「杜の都」の風土と文化に巡りあえる都市空間をつくる

紹介したいのは「伊達な川床」という取り組みです。あるアンケートでは、市民の8割近くが「広瀬川は仙台のシンボルだ」と回答する一方で、実際に年に1回でも足を運ぶ人は約2割に留まるという結果が。そういった状況を踏まえ、広瀬川・大橋のもとに川床を設置し、食事を楽しむなど「水辺を楽しめる親水空間をつくる」取り組みとして実施しました。

② 防災環境都市プロジェクト ———— 持続可能でしなやかな都市環境をつくる

防災・減災の備えを日常に織りこむ、その取り組みの一例として紹介したいのが、外国人住民の方々と一緒に実施した青葉区片平地区の防災訓練、避難訓練です。片平地区には外国人が多く住んでいるため、マレーシアの学生のコミュニティも参加し、炊き出しの訓練としてハラルのスープを用意するなど、食文化の交流も併せて行われました。

③ 心の伴走プロジェクト ———— 多様性を尊重し、あらゆる人が安心して暮らせる地域をつくる

多様性が尊重される環境づくり、地域同士でつながる仕組みづくりなど幅広い取り組みが考えられる中、一例として紹介したいのがフードバンク・フードドライブです。余分に買った食料品、お米などを集め、困っている家庭に届ける取り組みです。チャレンジには色々なステップがありますが、匿名で何か1袋を寄付すること、それも日常でできる1つのチャレンジです。

④ 地域協働プロジェクト ———— 多様性を力に変える地域をつくる

協働が生まれる基盤づくり、地域の交流の活発化などを推進していく取り組みです。青葉区桜ヶ丘、長命ヶ丘地区で行われている「地域ピカピカ隊」は、小学校の児童が電柱に書かれていた落書きが嫌で、「僕それ消したいんだ」という思いから始まった取り組みです。はじめはすごく小さな取り組みでしたが、いい取り組みだからと、清掃の対象を町内の電柱から公園、地域へと広げていきました。

写真提供: 都市デザインワークス



広瀬川で実施した「伊達な川床」



フードバンク・フードドライブの取り組み



フードバンクの取り組みは
おもちゃや本の寄付にも応用できます



子どもたちによる
「地域ピカピカ隊」の取り組み

参加者のコメント

参加者が興味をもったプロジェクトについて、その理由とともにフリップに意見を書きいただきました。
また、WEB参加者からもチャットを使って意見をお寄せいただきました。

■杜と水の都プロジェクト

- ・子どもたちが杜の都(山、川、海)を感じられる機会を広げたい!
- ・室内緑化の取組みを進めることで、外側だけでなく内面からも杜の都をアピールできるのでは。
- ・当たり前の空間をより創造し、生活の豊かさをプラスできる空間づくりが必要。
- ・仙台の玄関口(仙台駅)を出てすぐに杜の都を感じられるまちづくりを。

■防災環境都市プロジェクト

- ・すべての土台として安心安全が求められると思う。
- ・震災の被害を受け、防災の大切さが身に染みて分かった。
- ・防災意識を地域で高め、協力して災害に備えたい。
- ・防災を通して、暮らしからみなさんと関わり、つながっていききたい。

■心の伴走プロジェクト

- ・大学でオンライン授業を受けていて、人との交流が減り孤立した経験から、興味がある。
- ・老若男女、誰もがいきいきと生活することのできる地域を目指したい。
- ・ひとりぐらしの方などが孤立しない、つながる仕組みや環境をつくる。
- ・障害のある人もその人らしい暮らしができる社会づくりが必要(ダイバーシティ&インクルージョンなまちづくり)。

■地域協働プロジェクト

- ・子供会活動を拡大し、世代を超えた交流に繋げていきたい。
- ・若い世代も地域交流の場に参加しやすくなるといい。
- ・地域の交流は重要。子どもと一緒に取り組みそう。
- ・地域との繋がりが少なくなっている現状を変える必要がある。

【委員からのコメント】



榊原 進さん

「自分ができること」を考えてみるのが大切。と同時に、実際に動いてみることで一緒に動いてくれる仲間も見つかると思います。



奥村 誠さん

あるひとつの取り組みが意外にもいろいろな分野で役に立つことがあります。入口はひとつでも、そこからどんどん膨らんでいく可能性を秘めています。



各パート4つのプロジェクトの中から興味のあるプロジェクトを1つ選んでもらいました



フリップアンケートの結果を踏まえて参加者と審議会委員が意見を交わしました

このパートではチャレンジプロジェクト⑤～⑧について、
岩間さんと榊原さんに具体的な取り組みを紹介していただきました。

⑤ 笑顔咲く子どもプロジェクト

子どもたちの未来が広がる環境をつくる

ここでは、タブレット端末に入っているアプリを使ってオーケストラを結成し演奏を行った子どもたちの取り組みを紹介します。地域ゆかりのミュージシャン指導の下、複数の学校の子どもたちが参加して30台のタブレット端末でオーケストラを組みました。他の学校の子と一緒に音を合わせることで、協調性が育まれたとともに、子どもたちの自信にもつながりました。

⑥ ライフデザインプロジェクト

自分らしい生き方が実現できる環境をつくる

あるショッピングモールでは、障害者の方が描いた絵を支援団体がフラッグに加工、それを店内に飾っています。また、仙台駅東口で開催している野菜市では、子どもたちが販売業務を体験。売り子として店に立つだけでなく、原価計算などの会計に関する知識についても学び、実践しました。

⑦ TOHOKU未来プロジェクト

世界に発信できる東北発のイノベーションを生み出す

数年後、青葉山に次世代放射光施設ができることで、大学・企業等の研究者が多数行き交い、オフィスの需要が増加する、仙台が実証実験の場所になる、仙台発のモノが生まれるなどの可能性を秘めています。産・官・学・金・パートナーシップなどが、実は私たちの生活、まちにも関係しています。

⑧ 都心創生プロジェクト

人が集い、新しいチャレンジが生まれる都心をつくる

定禅寺通のケヤキとケヤキの間に沿道のお店の方がそれぞれ工夫をこらしたベンチや椅子を設置する取り組みや、人々が集い、憩う時間を増やすための社会実験を市や地域の方々と一緒にを行っています。都心のオフィスや公共施設、商業施設は老朽化が進んでおり、建替や再開発が期待されます。これからの10年で都心は大きく変わっていくと思います。



子どもたちも参加した「多芸多菜市」

写真提供: 都市デザインワークス



定禅寺通の歩道活用社会実験の様子

参加者のコメント

参加者が興味をもったプロジェクトについて、その理由とともにフリップに意見を書きいただきました。
また、WEB参加者からもチャットを使って意見をお寄せいただきました。

■笑顔咲く子どもプロジェクト

- ・子どもたちの未来と、子育てを楽しめる環境づくりのため、絵本の読み聞かせを始めてみたい。
- ・子育てする親が悩みを相談できる環境づくりを。
- ・オンラインと実体験を効果的に組み合わせ、子どもたちに豊かな学びを。
- ・子どもたちが年齢・性別・国籍・障害の有無などに関係なくコミュニケーションを取り合い、さまざまな人と関わり合える機会をつくるのが大切。

■ライフデザインプロジェクト

- ・さまざまな出身地、世代の方々がいながら、活躍できる場が埋もれているように思う。活躍する人の姿は、他の人の刺激にもなるのでは。
- ・人生100年時代ですが、カルチャースクールもスポーツジムも図書館も、孤立した方が多く、横のつながりが無いと感じる。
- ・「古い」をわくわく感じられるような場所づくりを。
- ・仙台の歴史や文化を子どもたちに継承することで、自分の生まれた土地への自信とプライドを持って世界へ旅立ってほしい。

■TOHOKU未来プロジェクト

- ・関東の大学で学んでいるが、仙台・宮城出身の先輩はこちらに戻って就職すると言う人が多い。戻りたいと思わせる魅力を、関東出身の学生にも伝えられたらいい。
- ・仙台市全体を市民も巻き込んだ最先端の実験場所にする。市民がここで開発されるものを最初に使える都市にする。そういった環境が整っていれば、企業も進出して、わくわく感も生まれるのではないかな。

■都心創生プロジェクト

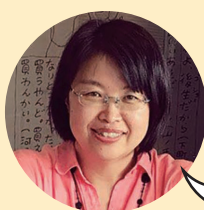
- ・定禅寺通が緑あふれる表参道のようになり、若者からお年寄りまで集まる、活気のあるまちになってほしい。
- ・ハード的なものだけでなく、今後ソフトと組み合わせられた場所が多くできると、より魅力が増して世代を超えて楽しめるのではないかな。
- ・まちなかのけやきの緑を眺めながら歩ける素敵な空間がたくさんあるといい。

【委員からのコメント】



岩間 友希さん

仙台は都会と田舎の要素を両方あわせ持つまち。小さなチャレンジはもちろん、「ダイナミックなことをやりたい」という思いも受け止めることができると思います。



遠藤 智栄さん

(都心創生プロジェクトについて)市民や自然、人と人との関わりを大事にしながら、どう進めていくのがいいでしょうか。開発への市民一人ひとりの参加の仕方も考えていけると面白いと思いました。

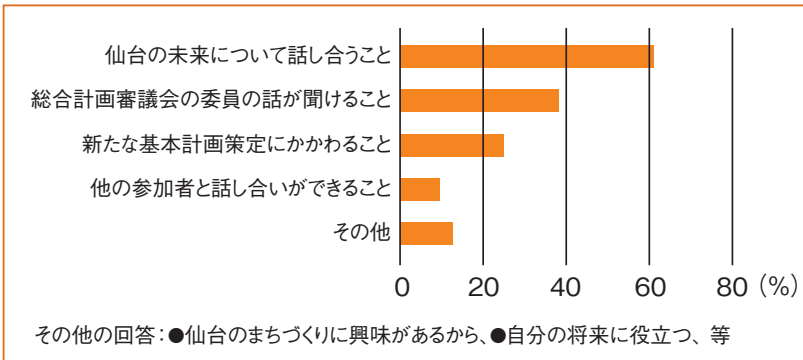


YouTubeライブのチャットを使って、WEBからも多くのご意見をいただきました。

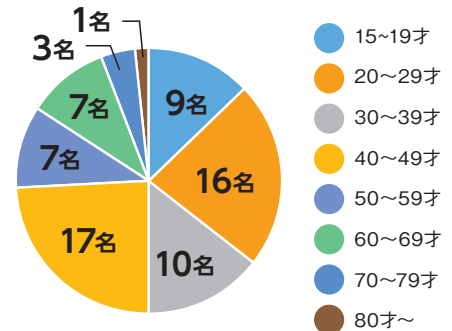
アンケート集計結果

WEB参加者を含め89名の方から回答をいただきました。

(1)このイベントのこういったところに興味があって参加されましたか(複数回答可)

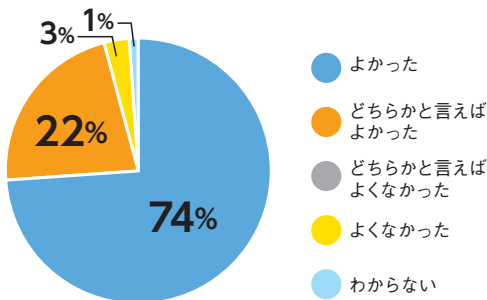


(2)会場参加者年齢構成

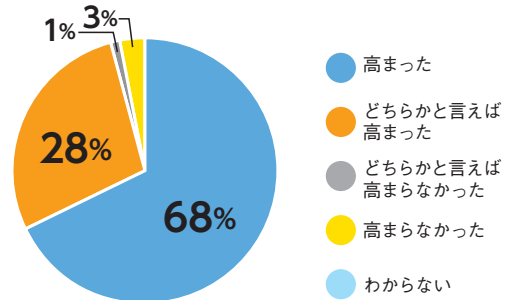


(3)このイベントに参加していかがでしたか

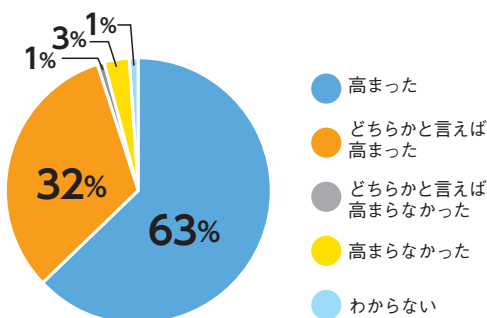
①参加してみてもいかがでしたか



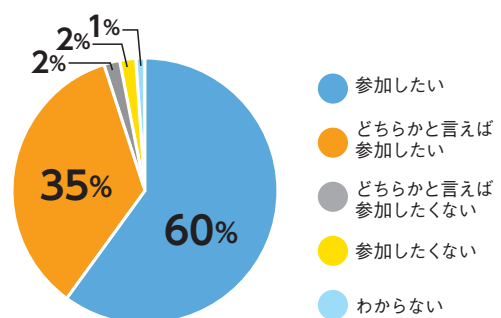
②まちづくりに対する興味や関心は高まりましたか



③新しい基本計画への興味や関心は高まりましたか



④今後同様なイベントがあったら、参加してみたいですか



(4)イベントに参加しての感想

- ・まちづくりのための取り組み、計画について知ることが出来て楽しかった。定禅寺通のスペース活用など、良い取り組みばかりなので、ニュース、SNS等で市民にも伝われば良いと思います!
- ・8つのテーマと事例が分かりやすかった。考える時間が少し短かったが、様々な意見を聞いて、自分の考えも深めることができました。
- ・参加者みんなが仙台を想い、考えた良い時間でした。
- ・自分自身がまちづくりに貢献できるという気持ちにさせていただきました。今大学で勉強していることが仙台のために役立つと考えるとワクワクします。
- ・様々な意見や考え方が基になってまちづくりが行われ、プロジェクトが進んでいくのだと再認識できて良かった。
- ・老若男女様々な世代の方の様々な視点の意見を聞いて良い経験になったと思う。
- ・プロジェクトの策定背景や、審議会委員の説明を聞き、まちづくりは行政だけではなく市民が主体となって行うものだと強く感じた。自分にできることを模索しながら生活したい。
- ・このような意見交換の場(イベント)は今後も続けて欲しいし、コロナが落ち着けばワークショップの形で開催して欲しい。
- ・プロジェクトについてもう少し詳しく聞きたかったです。これからの10年で何か活動したいという気持ちになりました。
- ・オンラインでも会場にいるような臨場感を味わえました。